千信集付庭の花　下

へ 2
2094
2

東家乙狂波奈巻之二

秋歌

　　文月七日秋立ければ

吋しよりあれなれにも初る秋をまへのけさ渡せしかさゝぎの橋

　　　野干多嫁来

竹の蓑のまつきの萩をこえへきぬまよみるゑき秋は来にけり

　　あれなみる宿に秋さそる

嫁なれやむつくらうち　ちりとみをきたねおもく風そあやしき

　　ちしめの秋

秋も能きあふのまつの縁はさの袖に秋をゆるそ知きの袖のせ

　新秋露

しら露の玉ちらさしとまねく秋風のあふみの風にみだれの袖ぬれし

招きむすぶみぎりの露よこころせよ俤のうつりやはてなんとも

絹ともの散しの白露はちらしく秋の風にみだれて

山里初秋

山さとの秋はいつもと宇治人にみせまくや宮の法華寺の露

七夕月

あはれなるのみを頼くものの月もこよひやかれならん

野外七夕

野くされハ細きまけの文月のなかのなぬかのあすのあかれ

海邊七夕

たなばたのかざしやちかくゆふ浪にうるむよるほし合の濱

代牛女言志

天地とともにたえぬ契をみのよにハあふくもよしや雲のかよひ路

織女契久

天なるや安の川のあふせハかへても絶ぬ星のちぎりか後せざらん

七夕草

ひくらしのおそきあゆみをかさねてもそのうちに君ハいかならむ

霧中七夕

やつるともこよひさまし秋萩の袖ぬるまでの露のさころも

鳥鵲成橋

かささぎのつばさの床にあまの河をやまでわたせとまちしつま

七月もるらしといはひけるかな

新ゐるもう行のかりかな吉しもまて小里のころあらひは
棚奥の民やこのまくちぬりの家ちきちきるいろて
の象けゐるぶ
皆人のころからや摂さくやもゆくものそし糸まててされ
なかぬのよれ暁によめる
ゐかれきそのあれひきゆるむ所といろく新志るみけ庵のきり史

二星頌秋
てよひよる来もゐるむ神代の秋よきまかし乙人のしめ

七夕侍典
あまの河やうゐ新舟れ梶のまにのきもつくきぬふてのそのえ

山家七夕

あやまきりのねぬるちるききまきて庵きぬかきんきさるの山住

星河落簪
乙河ろいのしつくもきさの新きまちるとえゆる東八郎

七夕演
まゆきへあまれ河原にかよいかえん待るむ妹をまちくまつるえ

七夕露
まちまちのひれかるよひの初風にちぢひきそめる妙くの志き露

七夕為
そのの川ば瀬にむ手拝ひて里にりもの弱さことよひくまよし

七夕蛛
いのるちむすめの縁きるてちく青りおなきくよくる蛛のちかはち

七夕檝

[illegible]

七夕雲

たなばたのひれふるよひは[illegible]

七夕橋

[illegible]のかさゝぎの[illegible]かさゝ木を橋[illegible]

七夕衣

人[illegible]

七夕後朝

[illegible]

二星適逢

機

[illegible]かさゝ木の[illegible]を一よせまはひこ星八[illegible]

[illegible]月[illegible]の[illegible]の錦をひろひいて[illegible]

[illegible]七つ

[illegible]人のおこせ[illegible]

[illegible]女[illegible]

七日[illegible]のうきにうつ[illegible]

[illegible]八[illegible]

[illegible]男[illegible]

[illegible]

[illegible]男[illegible]

[illegible]

七夕の[illegible]

[illegible]松風[illegible]

たなばたの夕へ男あまたよみて夫婦となる事
久かたの天津星あひのちきりなるへくてこそしるしあれ
七月女とも家にてよめる
夕月もまれにあふひの天の河おもひあふせはいつもゆかむ
たなはたの来年あふ夜をまちしらしむ
天人の手袖をかへてや世井のあまの川わたる舟八おきてこそめかへ拝
七夕秋の七くさによめる
まちえたるたの絶ることなくひかりたるあまの川ふたつ星かさゝくむ
天のかはかちわたりするねむかけみゆるさゝ尾花のかた
彦星のあふ夜まつりにて川水とよめよ庭のくさむられ
たなはたのいとつきひの白糸のちかみきたるたまくらの露

天にあまてあまれしらつかふと立つしほる藤なつのまや
たなはたの人まて汲て此秋の露おもしろきたまはれし水
この星々のかたなきさえて霧深き笹のほに秋風の吹
閏月七夕
ひとつなる年二度の逢ふ夜の又まちかねの袖や振まくらん
盂蘭盆
いましみる飛鳥の浮世の山よりのこるつみをしるかな
萩を栽て
風の吹けば咲も後より露に思ひの増すよ人まつ夕されは
萩を寄る夢
夢のみむすびつるよ秋の露しけきや萩のうへ風

幽棲萩風

すみわびてかりのやどりのさびしさハなかなかやどの萩のうへ風

かよふべき声もきこえずさしこもる人は

秋のみやあはれよするらむ杖つきてとはれぬ宿の萩の末風

栽萩

そのかミハ我宿にうへし秋萩の花つまれしよくれぬさきに露

月前萩

露おける野辺のさかりを萩人もよ月にやはみる萩の花かな

萩花露おもし

秋風の露のよわりのから萩しからみやぶるゝばかりをくらん

萩露重

くるゝまでの露ふかき夜をしかればやどの萩の露もおきあかしけん

閑庭萩

おのづから思ひなきまゝに住人もあるかなきかの庭の秋萩

晴萩

てり萩さく野にしまる清の影風によりて乱れし露ぞこぼるゝ

高円野萩

高円の野への秋萩あだ人の袖につけつる色もうれしくよるなく

たれ人かをさめしの萩原をうつろふ月のよるなく雨風にぞ

ちりをしかりしつゆならずたれかりそめおもひやす

て萩もおもひもとおもひおくもたるに思ひのやこの

よ萩の露さかりれハ露ぞたまよ

よあらしはおもひわびこそしらすにわかるる袖くさなりけれ

七月文月し秋のはしめしも志てゝ花を

おのつから秋のみちにまねかれてなれそ夜におもひして

野の花さかりにひくりて人にあつかるなりけり

きねにまいつてにおいて秋のはしめの心もちらくさたかなりけり

若菜野草をもとめとくらて

秋の野はなくさ秋風のかるく路なかき人そ　おそしの歌

草花交色

咲つくゆくみやまされは世の人の深きは色はかきりあからす

野花留客

花薄原にさく秋はみすくさ人のこころのひかれゆくかな

秋の暁花見る所

あはれにし妹かかたやむものおもひまつあかつき野辺の菊かな

蜻蛉野にあそふほる

あかよりはさみしの風をまつらきてさきをもとめかはるなりか

きちかう

さくらにわれし折やまれやらぬ夢の笹のきえちかうの花

槿

あさかほよ後のひかりん夕陰にましまされぬ身にあはれかな

鴫秋草

おくれ路のかほてくにやなあれ秋を待つる月草のなれ

やまとの国のこよのつきさをとめくらきかる哉

されバこれハ
まことよしちはらの故のさる人の衣に摺なんつきくさの花

小鷹狩
くるゝまのやあしたの風もさやけきのはたまれにちる秋萩の下

新秋風
あさく原たゞゐそよぐしら露にあらそひなる秋の初風

いとはやく初秋朝霧を
くる秋のゐるとくやとハあらさねて不えつりのとも軒の露かな

人のほとよく庭上露
あさゆふの庭にハひろん庭もろみ露もなか〳〵の数なかるへく
於て露

住すてし宿のとひくるゝきハあきちかき露の秋まさりゆる

桐思夕上松臺上蕭思蝉聲滿耳秋
しぬ人をまちのつくれのなかれよりおもても啼ゆく虫のこゑかな

虫聲遊
野辺にせし籬のそとのやちくさもおもしろも枯れ山しのこゑのなる
秋更て草枕ゆふ霧語よまりけめのまつむしの音の意

虫聲非一
時しもあれ妻まつ虫もまたなきて野辺のあらしに秋をしらする

まつ虫
なかれの風もきこゆる松虫ハその爪琴のしらべかよひて拌
きかん

おく露も霜になりてあさぢふはかれても鳴きかよふまじ

鈴虫

まちいでゝふりくる虫の声や野の名のまつろに秋のあはれならん

こほろぎ

秋されはかるゝのやまるはちかきおのれなくこほろぎの鳴

秋風入簾

つひ人のとはぬのやつれのひまよりあく簾吹にる荻の上風

絨の姫天の海へのうちのりの歌海も秋風と

や汝海の秋吹風をまる舟の帆にまとゝる海つりのやと

海辺秋風

うつりゆくふか山のあきは風をさむみ袖や吹くのまゝらん

秋の夜月はあはれきに鹿のこゑをきく

萱原や流るゝ露の月さへ志のゝにみなきおしくなるらん

山路に聞ける鹿といふことを

うたゝねの雲にあはれく妻や呼むさゝしのの小萩

きゝ澄まき舞ふ萩なく

妻こふるおのへのまけさの夕ぎりにまよひつゝみを猿のさゝしを

外山鹿

秋しのやみやまの尾花笠やまの鹿のなくね袖ぬらしつゝ

夜泊鹿

たちかへるのに鹿のなきてあしかりきの床に旅おきしつ

ききつつひのやまに志のはなをきく

おちしけるあまの廉のうちひらふさとの外に梳ねきゝる月八

いとゝしく袖こそしをれさそふしのへ野の草に枕ゆふよすか

鹿夜草花

秋の野に伏るかひよと志かの鳴音のはしきは立まよひて

棚寄の実のにいつまて山里に倚女蘿の籬をゆ

落つかるあとくの山の志のおきあまれ秋ふゆひとつの舩

秋眺望

雁かねのつきに風をまかせたゆみしゆる尾花のまふちた

九月尽つる盛庭なるて　秋眺望

見渡せはまたなきものにかゝる尾ろくちまちの外しねのをりふ

水口秋望

千听　稿

あしろ木にかゝるもみちの毛のと一ねりもかひ沼の川きりか

海邊秋夕

夕風にさわる浪のさゝら浪たゆまて秋それてよせなあらなくの

いかにつまのいそこのしきなかく

露の原にかゝをそれもかくてしも志んすかくかよふ稲妻

秋雨

桐の葉のつもりつもりちりくあしたの雨そ秋の部なる

新秋雨涼

きのふの雲のうつもわかるおりしまれ村雨そゝく夕へすゝしき

月をよめる

照りはへあやしきりのうかるもみりしろしも人まつえ浦

ぬは後宮の月の法記月をさ
たのしみをきて花よ雪よとうちゑみさへ秋のよもすがら月かな

初秋月

夕月の影ひかりのあく西山や秋のこえもしかなかなん
ほのかなる影をしらぬれハ月のこゝろひかれん秋のすゑはけり

閑居見月

誰かしるたよりぬ草の庵にもおもひつゝ月をみるとハ

独来見月

あはれ秋袖よつゆれる涙をまさへあはれへてぬ露の月かな

野亭見月

秋の野のみそよ露をまさる一よ月をまつ月をこふれ

関山見月

立まよふ雲をもたえて山まさきまかせみ山の月にくまなくともなし
如より月をこそみる

此月ハふしのたかきねのさゆる人のおもふひやとてさなるらん
いつも今月をみる

塩みちてよらぬ月みえてうむきぬよもや露のぬれきぬ

七月十五日の夜月にあかされハ

きのふにもあひし星ひかきへよひの月の影うつす

同し月十七日人々ともに月をまちて

まつほどのあくるまつ月影をやそへよもすがら秋のほかの

七夕月のあかつきに絶ずつるへうけさえぬるかな

水清みひかれする魚はなかれてやみさりあぬ月はみ行のかな
錦のよ人てあつまりて見ける
月はあめ八幡まゐりまゐる十五夜くのてら見ゆ池の遊びも
照月をともしなね池の底に見てあまの川原に捧ぐ書くらむ
舟とうこそ月をさける
あそびには捧さんすゝみれつゝもれみえむ水の月こゝの汁
城のひがしの十五夜の錦川の月をそへてかすを
いろみのいれもむさしの原る月まてむかふに河つゝみ宿

絵表数月

むさしの海沖よりいて秩父嶺にかゝる月のあかさもてらす
さやけきかなひかりあるや出るよりかゝるてらまでの月をかくさく

毎秋訓月

秋をあまたしむかへてきゝたつね月を見てまつらん

里林晴月

暮行なきかたの雲もおのつから月にいさねぬまきてなかめん
むさしのはまさらの庭にあかす月見てなき
むさしのあきらかの露に数見てさ月もなかむる秋のよそら夢
月を見んさてくのこてむかへひとりれ六
更まちて月をやさるよのきよみにまつかさにあかれとなるよ

停午月

立松の影さへもなし中空によゝめる行の月のさのかな

八好暮月

まきの山の夕ぐれ淋しさ松の梢まのこる影をしみおもふ

有明月

影のみや猶出し霧のまよひにきえやる有明の月

朝霧の明ぼのまて落きりのうへきえゆる有明の月

もはや有明の月をかく

訓見つる秋の夜も月みし有明の月そともちかへなかりける

暁月歌雲

雲はらふるあかつきの空に入かたきは望のよの月

くもるよの月

大空をや立こもるきりの海よりの月の浮雲の出てまし

八月十五夜

むかし今明るまて見ぬむかしまて残りける秋の今宵の影

八月十五夜更にまかれけるに人てとひけるに

ともによめる十五夜

なかそらの人のこゝろもまち月も雲をまちぬるよひの有明に

名にしおはゞくもる月のつかれ大江のこよひとてよもすがら

わかその秋るよみの影にもみなかよひの月をまちゐる人

露ふかき影をまちまちつくこのつきる秋てきよ月そてやとれる

かけもさね庭のこよもの影をきくかくやかれるよみの月をそ

さらぬ夜も秋のくれの空をさへもてよひは月まてこゝろあかれ

てよひしも代の床よりさきねてまて沼客の月をさそて

むかしたれかくる高もかきむ影まきのつるの露の月

さいつころ山のふもとにすみける聖八月ころあめの不りけるに
てらにまゐれは夜ハなかなかあかくまれなり月の影ハさらにも記
あかなくにむ月とハおもへとおもひくハてよにのこりさはさる人
いつかあれと秋のなかその井あなくもりてなかむる月をこそあれ
あはれなることよひの月のかけのみそやへむくらさへさハりなる
とこしへともかハ人のきひきつおもれしん月まつるらめ
名にあひつることよひの月のくまなきそらあかくあかめや
八月十五夜鏡の姫君の月宴の歌十五夜翫月
あきまた八月のこのつきのあハれ風もまつにかさねおもひの東の風
やむよるもくもまにし月の宴あるなかに池に水をさへ
このまく鏡を月のかけにおもひはるるく鏡のひもをよ

むかしひとくみのとゝへ金沢にてあそひけるに
天皇よりも家井の秋の月につけてまいらせよとむ庭の歌の
はよろしれけるにこよひとあきとのゝもしきにそよめる
八月十五夜人々とゝひまゐらせてこよひのあきをとよしみける
十五夜人々とゝひまかりぬるに夜一よくもりけれは
こよひしもさまれしのこさを光まちて月ハつれなきよをきくの影
休みある哀れ歌さきたくよくまゐりてちかく諸あへのさへん秋の夜の歌
八月十五夜お哉う色てる不
いつあれてよひの月をとやもさおもひ袖ちらさハひかりきるまれかわ
松の緑きよかまつれは月の影のけろひにうえたるをそ
いつのまにか月八揃その影かくむ松の藤こしよ光かの影く

秋の月に山家廉ちかく

月影のくまなきよりもかへりて山つまにさくらぬをあはれむらん

よる見し雲もまさりてまかせて月ゆくとおもひし

ちりまがふ雲の浪なれ大空の月のうへ月ハくもらしのなし

月読をよみし歌

清幸せし谷の篠つきのかなしれと月のさ影ハいまもやどれり

秋の月ながれにうつる池なごり

大空にひかりそちぬる月影をしたにうつれる池の面かな

あれたる宿の月

古しへを志のぶの露に影とめて月のみすめるあれはのやどに

旅の宿にて月をみて

おくれぬとうける袖にもやどるらむ宿をおもふての秋の月影

志つかに月をみる

さらしつるとをゝるつの松のえだにおもひあかれる月をみるかな

月の山にかたぶけるをみて

こゝのえにはのにほへし影をとゞめ山のはつかにかゝる月かな

山里にひとりの月をきゝて

秋人のまかのひとりはかゝえてし松風さしのおとそのこれる

さらなるのことに男にかくるなのをとりのかなくそふ

人ハいさ声に露をかけてきくほとにておもひまねくとふる

山里に侍るとし鹿のなくをきゝて

秋深き山田にひとりまちかねてしも枕にちかきさをしかの声

八月十五夜人々つどひて歌よみ侍りける所の月

あかずして暮たるとしもなきを、

いにしへのくもらぬ今宵の月を歌清き人々あれ本家

廿日月

朽える山のまつの月まてのさしのぼるほどに志賀のかみの

月前草

ちよのいやかの草の露あまれにうちよそひやよせかへ

翠雲妙佳有

詠つゝ月をねていふる人のこゝろやうつるまでとかえなむ

雲間月

紛きても秋のさえて見われは雲もとまる月のかけかな

山家月

さを鹿の鳴はなかぬ宿の月かくるゝ松にてそきくハののれし

月氏東山里子

山さとの月まちいきて犬のその秋のあはれのかきりなるらし

山里にて月の夜こゑやくそ秋守

あはれなる秋の夜のこゝろきくなとしこの夜る月の秋の夜

山月入簾

さかゐのかきりのやらやまのまつをかすかとまちまちてはなかりけり

野月

秋の月あかくまてみつむさしの廣きをもあかく民子

野月露深

むさしのや露わけいれはむかしより草なき路の月にきて

秋の月ふりしくきぬのしもにあさき

ころも照す月も深くむ綿のむしあつし かくれる秋のころもに

池月久明

くもれともかくれぬ池の鏡にハ月の面影もおいせぬかな

月照江水

むさしねに雲をとさはかさされたも月よろこひける江川のみ

山川に月のうつるをきて

いくよへしのむこのちるむ秋のよの清瀧川のかゝみに照る月

江上月

影うつる浮きねのかけもあかしハあさる難波の江の秋のよの月

浦月

住吉のみきてなかつきのはまかれ浦風の波にてる月

古寺月

あへて世の秋ハものゝ八たつきも山桜原のおくふかみる月のこ

志賀の國なる玄賓法師とまなひしなる秋古寺月

とりわかきを深くよめる

秋更てよ秋くれあれ月影や鳳の松の音もさわるらん

古寺秋月

暁にかへり川の戸さゝく誰か見へる寺の松の嶺のおくの有明の月

樵夫帰月

秋深み山ゆふ霧かゝる志ほりして月そさしくる山人

田家見月

守りゐる田中も秋の月のよは都の人をとめてしがな

加以月

たまさかに月もひきくさまゆみも枕ぬのしるきもまかれなり

名所月

大原やおぼろのしみづのこゝろて秋八月も宿りかけけれ

月下遠鐘

流月におりをあはれさくあはるまたものかたのこゑの鐘

月前擣衣

古への人まさるや尾花菅守のかりほの秋のよの月

月に神祇

男山神のこゝろゆきのまゝて影さし出る月そ清川

月前寄情

忍ぶこゝろや秋来ぬるの月影をあはれやまちかねたまふらん

月を見ん待るまれてかたりかの影をそてにうつす

月前眺望

しら浦のつなてとさしも月影あさの高山のたく漕舟

む川やかれしかれとよはきさしそうるまとゆる在所

月に祝言

八千代の瑞穂のうつす宮る秋園のかさねてぬる月の

九月十三夜いつれ人こゝろのよるもよ月に祝ぞ

つきせぬ秋くりぬ月をしも君のこゝろよくへてたのし

九月十三夜くもりけれハ

見るもかくさ二夜や照月をめでてあまたせし秋のなごりハ

十三夜人につきひて歌よむ海のほとりある人のもと

に月のひかりをかくしけるを

あまのはらにあしたやよやそらハ波のつむ月をとこよや

九月十三日芝浦のほとりにて上野の鐘より月の出る

をみて

明けゆくる秋のなごりを待の月けふ限りぞと思ふのこりやと

菅 梅月

雲のうへに戴くしめよ秋の月渕し露のなごりおしまれ

弱竹の人

唐錦たちぬる海の錦の秋の紅葉やつけて

弱竹のつたへる女主あり

うきなのこし六郡の錦あつきのはきてもちえぬきさけハ出まし

初雁をきて

あきけハ先えてられ三吉野の田面の雁のおとなもよし

道行人初かりを

あのてらに鐘ゆくハきこゆ人初かりのねもことなくなる

月前雁来

雲の弓錦の月のうちのひ月のよるてや雁ハつらね

紙売帆かけるはらあかり雁つるさす

海原やおきつ舟のともちちのあるかにあらて雁渡る

旅宿初雁

夕されは野への草葉にすゝきちるこの秋の身のおつる涙そなきの聲

妹かりもあらぬまくら雁なきてきくもことにこそさむくも

おもひなくも聞ける名をたつ人なかりせば妹そはかなくいはよ

馬上聞雁

秋の野に尾花はかりしけの駒ゆめにきく雁のこゑを聞きゝ旅

雁風にかつちるさとの人をたひ古き集のうたをよめる雁を待もかる

水辺雁

松風はうらにしかつしのやま所のもし鈴をきゝてなくなる

空はれて千鳥もまた過る月の桂にもこゑもやさしき[illegible]

月前鴫

露深き野の下草に鴫のたつ羽風にもかほる月のかけそこほれて

河霧

あさまたきかはのまよりも流るゝ舟の月さかえこほりて

湖上暁霧

松原にこのまにあれはや霧こめて志賀のうらはさひしきつの浦

月前擣衣

はつ秋の更てし夜のひとまより浪をまくらにして露の衣うつ也

かならて竹のきこえ夜のまに秋の月

月夜竹枯

梅おもはぬ霜のふきしけ八月の清くたのむ枯すあはれなるかな

擣衣驚夢

まひ人の旅のおもひのかよふにやさむる枕に露けかるらむ

夢のわたる旅人やねさむらむよしのゝさとにころもうつころ

南北擣衣

ひんかしに織るらんのをちにも衣うつなり河のをちこち

名所擣衣

ふるさとの旅のおもひにきこゆなる月の秋しのびて

更ぬるか月もさゆる夜の里のきぬたのおとにきこゆ

夕葉

村さめの露もまたひぬ夕風や山路をちらす人まかせ

なかれの蛛の絲の葉のなみをまつ袖にかゝる

月照菊花

澗にうつるかけも秋の月やさかりなる菊のつゆ

秋の夜の月あかしまがきのかけにも葉やみえつ

くまなき月にてらされて夕つゆの光をおくませのしらきく

菊の花いろなる水に老をわする人もなし

そのかみの山路の花とききなれし一本の露にちよやへなまし

旅宿聞葉

たちの雨かれはてゝききしの花になつかしみおきて見るのれ

伴葉近秋

あしひきの山路の葉や旅人のころものそてにさそふなる秋

やひとの錦きの袖をふきまくくのかなくと云るを

思ふとこのかゝるむすめんつかみて八潮とかへるべき葉のうへの露

川つらにさくさくらはそみち色の木

きくの露つたれるようにかゝらつ木のもみちもさきにはあちらちん

田のつらに柞もみちかな

秋更て色こき錦の井にもたてる柞のうすもみちかな

月照紅葉

月のかねさ浅みまかせてあきさくもてるてらずよもみちばの色

遠紅葉

名さくれは錦の衣かり霞しるのはるかにみゆるそもみち葉

紅葉似霞

こゝろさくえよそめる木のかけと遠くなるみてかへりそめむ

山皆紅葉

のこるまてとみちぬ山もあされはやくれたるすゝよのの歌

古今集旨題いたるきかみち

龍田ひて風にもの吹そてかさるひの岩のきもこもちを盛るかな

錦まつの山の紅葉を人にふらくの色なら

つゝみて下照秋は隠し名きうつ山路に謡のもてらむ

なる井のためよりもち流るる田にかゝるに

家錦のる田つらのいろのうすもみち名乗秋に染まるらむ

水辺紅葉

うつ人ちるかやいつるくらむ山風の山の岩のもみちを

あしろにかゝるもみちはを

みよし野をもちえよせてあしろ木に移はいさよふ秋の色哉

にしきもみち流るゝところ

さらかさ錦の筆と見ゆるまでに細谷川にもみぢちかのれぬ

川つらのもみぢ立ちかへて

名取の川かみ川への紅葉でゝなるかに深く名を流れ

川なみてくもみちの散るところ

よしのゝふくや川との渡りかりもちる文もちてもくらつはなるむ

田子の浦にもみちのうゆるかく

その浦や秋ハもみぢてられなるふしの細のくれてなる世も

あしのうしもみちのほうけなる舟行く

あしたる浦なく舟のかよいてなみのもみちえあかまゝゝも

もみぢやちりてこそ

なみだかもつれなきかたのたもとちりて袖にむすぶ雫を重くなるゐえ

紅葉移枝

かさぬるはけふしらむ枝の色は檜にの手乾神無月まで

錦中園柿葉の杜に槻あまつゝ色そてこれにみえく

そなへるそこで人のまゝめぐれは

古人の心ならは移やへくるまもいや深くは散神の心く

人の山に文しあわせての色のもみちはおさきそめぬれは

秋きかざらむ山の深さも深しもみちの色をこそその葉

鐘声送秋

なかのこに秋そちむる山そかれ入相のかねのくれの鐘

うら枯るゝ野辺の陰ハかのひとゝせて秋そくれゆく

山寺秋暮

けふ一つ秋にもあるゝ山寺ようつろふ色の袖そさひしき

羈旅蜻蛉

たのみなきかけろふ袖のあしたの露そ乱れそめける

草間秋雲

あしからや冥の村山秋まてもまよふ岸のうちに

暮てそ秋の野をよつくかな

うつしゝそゝの雲の空を渡りまよふ大空のかけハとまりよ

野色混秋光

おきけるに露にみえるに深くひつゝいつきに写しつゝる

人々秋の野をよ転して

秋の野ハうつりそめにし草葉のうつろふ色のひとつれてくる

山路秋行

さそしこの暮をゆ山を秋ゆけハ袖そえしる初しくれ一の友

八月のまさ思ひすさふ出る西の西行庵へ人てとらよ

けふ秋山をす拾ひさすらひ

たきよの響にさそ霧のまれぬ山へ入てそ

秋雑

時雨のねにふりの岩にもさそ暮れゆくる秋をまてよ見えけれ

八月十四日の雛を扇会しける時さそへのかきのきぬ

しくれせる扇をあのひめさまてそまもさひし

こゝろあるを出してくれなさへ人なるとて
露ふかみしとゝに咲野の秋の月さへ露にもぬれまさりて
のこる月はもみぢ二のみとまかせるをむつまじく
ある詳あれせんのうへはなかなかにうつくしなるはこゝろ
おきさき秋のあはれをきかされし柳のもとのいやし
くさかきのゝ山吹の錦おりかくるまで深みし
あまるの子のつく恵のかぎりちかくなるまでおもひきこえて見ん
いろ世は嘘まくらにいつしのかたへつりかく恋しかれ
さと旅きねがふかれし萩の葉も志げく人なまく萩
の中ふおもふきよるのほろしと涕みなちらなくなるを
るまでとしつゝらあきらけしゆゑまずわれもこのうめ

さくのあかなる月も秋にての歌八ゝのかなる恋にて　あ
はれなりし　もいゝつののとよわ詞のつまとて　さへ
かれるつるはやゝやそめてまさるにさすかし　聞と
このかなは
初しくれあきつきそう秋の色よ人のこゝろをそめてゆらむ
こは早月廿日かるにちそこなるひてたれしてめぐるかを
のてよにあるく
ち月つくりのみ井見たるとて
雁鳴て露華にいろこき里としてまちての秋まちて迎ふ詳

宇多奈禰波奈志 巻四

冬の部

初冬嵐

背面(ソトモ)なるいちしき原はいつしか冬さみしと嘆あらしふ

秋くれて未だ冬かて能因哀さひませる人このあらしの

烈しく吹る木枯もものにふれてすくれし峯のあらしの

山家初冬

山里は冬ぞ見ゆりのひとふきハ都よりも我やまされてあらん

十月更衣

秋つ羽の袖ぬきかへて今朝は花摺の衣はころもかさね来

冬はさしめ山さとをとふ

おてらにあはせぬなみちれ雲のとをさふらわれてこし路よりこのあたりて
冬ふかくおく霜さむみたく出の露しとそんやま路の宿

初冬時雨

きのふ月はふりやし浮雲のいくへやけさの時雨なるらん

十月二十九日東海なる井お妹院なるあるじのもとにて
狩おく月の光のみふくてつとひて雑称をよめる

秋くれしこの山のさとにてあられふる落葉のうへにふりし時て
神無月しぐれの雲のふかくるしる落葉の山さむくもまよひし

時雨晴

こぼれし友山路てゆれたて時雨るいあとよりはそのゆく流く月のれ
あらつきのしくれ

あくるしも霜にくれさも見えたふねさめられたきむつしくれ哉

山路時雨

大きさうけよりしぐれやすみなん庵さめて秋くる行まん
おもしくれ霜葉てきしまて路ところ山わくこそもほさて帰らむ

紅葉時雨

しくるゝや花のゆふ日の空やたらよふほとしさみち紅葉

海辺時雨

はるの山の松のあらし水やあれてかけしくれよ袖ぬらし　宗また

山家時雨

里のきくの秋おちそまし里のむらしくれさうの横にそやさむさん

田家時雨

ほりえの田つらねむつきもちなときにふせやにも新ふ忘れ給きぬ
十月十五日海へおなしひろまに忘れ給東とふ人
あそとはやまき
これを見て給ふ東夫の時雨ゑ笠ぬきかけて頼のうら
おもかけにこる
神無月おもかけくる時しもあれおもかけにも花のちらぬこそ
西国のいつよくも神無月をすかなくとみれとよくさいつまきも
うきれ月み給ふかれとも見ぬ世とくさを山のすそにすそのゆふくれ
神無月の都の外日あらはまの夫の便りの旅へまかりく
名残ふとすへくよめ歌
世の中の名のもとをちかく めくりへも又使りをみせらのよそみちる紅葉ふ

こよその人はまれあかたへの時雨の蛙の頭のみせくてのち 若者
のんな月はの中にすまふ地とやて
おもおる木この葉をみちにたつねきて忘れの音とあひやとりせむ
初冬落葉
冬きぬといふ都は便りなれともこりし住まし丈ちすてゝめぐりくる
月は更木の葉のちるなり見えく
おくあるにうつる月の影あからちるもみち葉に更さへそえる
月ありき更木のちる
こつ花咲そこゆる月のゝみちすのころもそのかた木の下の世や
関路落葉
冥こゆるにひさしをかの麻きぬにおそろしその名さへなつかし

みむろ山のいくちしほなる山かけて見えつる紅
さく山代の柞の杜やはむかしやその色ぞ見ゆらむ

瀧落葉

いはきのおち葉にちりかゝるなる紅葉におつる岩ねのたきつせ

河上落葉

紅葉ちる岩ねの[illegible]紫苑 ぬれて[illegible]のこしのよどみにちれにのみ

落葉浮水

落葉ちる嵐のうへの[illegible]に[illegible]七瀬よどむ木の葉ちりまさる
山さとにひとつ[illegible]本のもみぢ

閑庭落葉

夕月のかげさやけきのなるまさきのかつらちりまさる

むら時雨ふるともこのもとにかきつもる紅葉
庭もせにおもひみちをやせきぬらん紅葉の色見えたるなり

十月ざくらの花へてのみよく

志ぐれふるのをりみちゆくはなさくへとてちるおそれ

残菊

うつろひもはてぬ[illegible]のふかき菊も[illegible]なるませのまがき

籬菊映水

大堰や[illegible]志ら菊のうつろひゆく[illegible]

志も

白菊の[illegible]あやな枯野[illegible]

寒[illegible]

ふく風のさえゆくまゝに雪ふる松の葉に志ろしみせる雪の色かな
　金地院霜ふりて雪まで積もるゆき年ぶし
おなじくは尾上の松ばらの雪ふみわけのねのあけぼのかな

松経雪

三輪山の杉のしつえにおく雪ふ心ひかるゝしまつる跡やたゞらん

閑庭霜

なれにしきのみねかの志ら露やちる秋の庭の霜となりけん
碧海氏家時金子長院栗庭重之
見るごとにさかる松の下たる露の霜の下さくはつのあくしも

人従板橋雪

弘なく雪ふみはしばし板橋ふたつの跡のあとやのこさん

人知ならず冬くる山路のさびしさを雪月に
冬がれもしらぬ松せぬ色のなれやあしたの雪もふかきかし

木枯

このころはいねさめがちに木枯にさそはれおちくる山のはけ庭尾

初冬木枯

たてあきのすみかれの露きえて厭あらそなるこがらしの風

寒松風

岩のうへふくやひとの松かぜの寒るあらし乃ねさえぬます
嵐嘆京子
雪ふりてさるいなかくぬ萩枯れにしてあたりさびしや嵐あかしれ

寒草帯霜

紛れさふ村く雲たえまきおさぬるにくもらのおいにけらし

蘆花似雪

白妙のつゆその風にみだれあしのふしなゝはさむき冬の江つら

氷

つくばねの二つにわかれさえて落る瀬のあふさるゝ水るゆゝ

河上氷

なかれゆく瀬に岩ならで志きしもあらで江のしものかつ水るにそく

氷留水聲

岩もとの岩まにかゝる瀬の音もせてこほりてさえてはる池の

冬月

風さむき夕くれてはるなからむかたのしはふきて夜月のけ

大空の嵐のあらしにさえて影ふくる冬の月かな

暁寒月

きのふこそねさめのひゞの音にそ秋の名たの雲の月影

大伴のむらく越の音もきえて梢の雲に月そてうつるよ

霜夜月

さゆる夜のみさむ萩原の枝の霜を照る月影

寒山月

あらしふく嵐のあらしの秋あかみゆる雲に冬の夜の月

海冬月

すゝねむ空のよのあらしさえて月影そほるいつれ海つら

湖海帰月

冬の夜ハこほりみかける空の一むらもよにさえのたゝやさしる月てさむけき

家にて十月朔日冬月を

枯わたる庭の志けみの霜の上に更行月のさえまさるかな

冬ぬよの月あかきにかゝるまておもはせ給ふさむく

山あらしにふかれて落葉の色さえて月影のほるかみえてこし

嵐ふく月有をりを出て吹たる

時雨のさみちなて月はあらし

此ミち葉のちる木のまにうつる月の名をもかさねゝる

神無月なるよひのあはれを

又木枯神無月にあさくなりゆく秋ハおもひいてあるかな

梅田

このまにくめる露ふかくさくさしく嵐の枯葉

山深きよもきふの

人影ハ夜あらむ山の木のまに露さやか月影のあはれ

嶋の雪

浦つたひとめてゆけハ大淀の松かねつきよ千鳥のむれ

夜の雪

いつまてかやまのはしくるゝ秋の夜のよるの雪かな

湖の雪

富士のねの雪もつもりまつ夜雪のうへにおもひなき雪をや見ゆる

梅のとまりみかよひしこと

難波つにさくはなのかことにいくよねさめとふしかりなん

み雪

山河はやくはやきちはやふるさとのみなかみのふもとにみれはみゆる

網代

大井のこほりなかるる水なれはあしろもちの業とのしこき

網代守

あしろ人ひさしきかはのせにあらしふく寒ころ

落葉為網代

そみちはのよるあたる時そ冬のよしきこそきこれあしろもる人

何しえはきみにかくれそ

もしひめのこのきの神のきこれやせのあしろにまかせてもちたまふ

加茂臨河家

七月東に大比叡の袖吹くかせはのこる川のせ

あまのやくきりし行のまにのほのよふ坪しろき神也

あきやかなる月をみそらしねらくくものしのほとにもなさ

そのふるきあふひのさしきりのよあかる神に空なしける

霰

刈田にはおくそのいはふそれなひきまのまに遠ふあられふるなり

雪いさこのふり

いそのあまはうれ浦のまなの松風にちるよ花ころまく

あしたふきつ雪にみる

そ空られはねくらにかへるなれつそきまつよ初雪ふる

紀右あそくられに行し橋のさそとるを空なるとさやみゆかりかな

十月十七日初雪降けるに雪の声ありけれハ

まちかくしたるも人初雪にあひつけるまて庭のおもひに

嶺初雪

おほねきたその嶺まてはひわたり世ハそつもる雪にしらねのいさのかせ

橋上初雪

初雪まつあふむつの橋のよこに見しれものなつかぬへき

雪のあした

みつ山のまきのさかき路さへ降るまさに朝ゆきのけくこえいのしらぬ

雪朝白雲

きみねにかさねまてさそてのまくはまる雪まさりける

赤山暮雪

こゝろハ世に降つもる雪もしらの月にこの頃るすみよしやま

雪後群山

ある日のひのよむ木のよむさしねやたえねこえもまさりやかさ

炭竈に雪ちれ

みわたせハまのくしろ路山風に雪ちりけるせきのあとのき

関路朝雪

朝ほらけ関のとえ乃東人路おの（ノザキ）の羽に雪そつもれる

進路雪

山のかのまつけの木すゑハふる雪もちきれちえたり

雪みちにうつむ

あさ行る人もまけすやきのつむゆきの雪に訪よるらう

古渡雪

まくらのみこそのもとかたに新わたしに世ふふかゝる雪かとこゑも

孤島雪

緑なる海ふひろくひらけこえぬらん この雪津もかゝる浪子根島

禁中雪

のきちかく松ゞきに雪ふあやつけく雲の上にあたるこゝろもちそれ

禁庭雪

まうしきやうその桜あまりに咲の花をあるしらの雪ぞ見れ

神社雪

のしまの神のそむろのちよもやくらし数々の雪かせうける

むさしなるぬ川辺も雪つもか地への道てなる神の冬十一石

古寺雪

さ寂しき山風の吹きあれは横河辺は雪ふらてちるなり

遠村雪

とをさかれは里のあかりて遠かたの雪ふ木の梢のもの松のちく

里雪

いにまも山家のこのうちにたえく雪も清のふかき秋えおいて

市雪

新ふりしほふのまもんの桜市のうちに雪ふつもるらむ

山家雪

わの道のふこえ雪深く鳥も人のもなくらん初かひかく

山さとふ住む人雪のかたはる道見えぬ

むらんと今し鶴に渡はせる雲ゐのかぬくよし野やく
雲の中月やまれかくしらし
いさよひは渡る雲ふよ暁に今し人もまつ波や寄てある
まつらんとこしのひあかや住みれかしの雲ふと洩てあけ行
やまかよれ雲のあたまうらうつかるくゑ
立枝のこすゑ雲ふ立ちかく絵は付けめしみよの山本
田舎雲
東路の花おほとくさ露は田ふせの雲そ立つけのかな
ねひろこのむかく宅居雲し
立よれ程遠の春ハさし花のうからくのまゝ松れ雲の乳
名不雲

み山むの雄のけさうるぬよし残山の峰ゐる空かみれ雲のあとかれ
志うれ山越ふ雲の子かくみかくれハ
花まれあらし行もなし白雲の立るとも渡の志ゐのやまこえ
花の本雲
たそかれの志ほひたまのまき新は桂わきそかつまる雲さ乳
花ちる大波の雲かにきれを吹のけかてうる人やかれ
うちねさ山雲語残雲ふあちまその春静にしあそれか乳
るこ雲
花るかて蹄は春かや花まし雲ふ行てるのひ残きこよ
雲立てくさつのふゆくふこゝの松てきらまつせらあり
花さめて月も見つゝあくかれぬにそ霞のゆきられまお花く

雪ふかくふる人ハ身にしみてゆく

まさる河の江こそ渡りつくすねの山まつつく雪にこそあれ

月雪の夜身にしみて人のまことにしらふ

なぬさへくこきハのこし月雪にまさりかくおもふ夜さむのそら

雪中遠情

あしひきやさしかはしおもひのうちふるふみの雪のそら

雪の中に我ことおもふ

ちるふしのねかけくる雪にまさるへに河へよあれのまろん

雪後眺望

まさる河のくもりことよしのみくる雪なるまてあさしら雪

雪後寒望

さしてゆく鷹のこゑもつれねにはかなきの雪のあけくれ

雪の山にはゆく

まさりけくあらきひとおもひ村雲の上に雪もはるかに見えな

竹に雪のかゝれるに

たのむけるやねてのうへにおもしてほる雪もおもしろきしみ

雪の中に旅のみかけるに

白くみえ雪ふりくる雪のみ明るるつもる雪ひろくもの

こゑしつみて本のみの枝たかく雪ふかけ流るる庭の中の

ぬひのおもふ枯野に行に雪のつもれるにいるの

おもひまさりの行のよしまもに雪のつもれるははかま

人ならぬ身におもひゆれの心ならひくるに雪の本に輝

このはるにこそ歌

冬ごもり人も結ねる我宿のたきゞに櫻の花のふぶきのをくま
　松山にちかふ住む人へのつるがく
おかへこし花ところせきのゆきつの形まとつまるこゝろの歌
　春いたの陰るふこのきてる人ひく楽橋かへんとよむ歌
雪深くこゝんへかたあはれにいよいよもちまかれのまつ舞
　雪のあしたは谷に頼める人あり
花と見る夕の松にちる雪はおもしぬくくものさゝめごとは
　大かけのかとへにみてゆきにほとよのくるみなるとしぐる
白雪をやとにふかくつもれ大みちおきみくつもる竹のこゑせん
　このうちまゝ雪ある所に雪のある歌

さやくよるのしらふにたるゝ雪と梅が香のたえまはらふ歌
雪の大方雪ふりけるあしためしの梅が香をはらひむかく
なかなかにあはれまる梅ははかなくんやこゝは深つむ雪の
　花とちてよるしとのひおもせられて
あはそのあしたの雪が来るまでにふる人も月とせをやすらかなむ
　雪井綿栄
あくかれさうのこころの花とちる雪ふれば花のおもかくまちもあく
　暁雲庵長松
梅のかをるひの流し底てゐく松のくる深き松に雪ての歌
　野狐舎
雪ふれはあけしみやうかね待てむすこゝゆる暁の月の人

大晦にちかゝりけれは

大空に霰ふきしまく雪ちりてかれ野のすゑのかれの秋風

鷹狩

秋はまたみかりにかへるとしふかみ大原野にかりころもかな

はれまちかけてなれの鷹にせきくさくかゝるみかりのはての友

三条のあるし鷹狩したる家

うらの瀬やとまりかねつゝ風さむみかれ野のすゑにまきそふ狩人

女の家に狩しけるところに

むかしのうらにかりくらしみかりのつかれ人

来逢ふ鷹狩

かへるさは冬さへよふかきの暮れぬるさとに鷹ひとつかな

炭竈 雪

きえ竈やすみのけふりたちそひて山のはしろくあけぬれはなり

冬こもりしける家

人こそしやまのかくれ家にまつ人なきふゆのしつけさ

埋火似雪

冬の山やまきこのは見る炭竈のけふりはきえて埋火

山家埋火

冬ながらかくやきえなむ埋火の夜半の新たにおもひゆくさき

神楽

榊葉のちらぬ歌声もあまの岩戸のひらけしまゝのかけ

おく山の榊葉とりてかなてつゝあまてらすかみあそひせむ

ゆくしは神さまてるらむ大原やせきのみかの清さしまらんさ

禁中神楽

主人の声のあかるひハ案かしよるも人まさる家の杉くまく

佛名

ひろせみつるてよひふ津く路のきつれ初てこの名詩し

修行なる西ましるいく山伏のまおいゆかしこのへなし　ねきけ

佛名おとなふ家

木くれこゑ路かつくかさかけの名をとなふある庭の白雪

佛名のゆかしたかる宿え

か山か山むろの名ほととあくさハのみさみやほしよこそよ〔け〕てん

手内早梅

せのかのやとるも梅咲花のさてよみのはまし香そろひけける

菜暮近

ぐし月しハつしの年よゆつるまおしかもくそらもちのもと人

ぐし咲く花

ぐし傳のよとまねハろてこころあをもあまへ絹安らなりけれ

まかしまちとしかりしむれひらせのころ〔け〕とさらをなめや

まるかし結ひ〔か〕てしらて花のよおもひさくめぬらし咲にのれ

海邊之菜暮

手傳のそこのまるらんまいしそやうちのせよおさつほうのせ

まくのはく風よまきる浦舟のくるとふ咲くさくる月見の

郁菜暮

海山のかぎり尽し松のつゞくも都のむかし語られしの乳

家々歳暮

家ごとにまち得たる春とぞならぬやなきこそありぬる時の来し方

閑中歳暮

としくれる太山の外世の年月にいさゝか心にかゝるまじき事のみ

こゝ定めおかねむ立ぬ宿に月も行のゆきのいそしみにさかける

歳暮寄松

年くれぬ千年もしらぬ日におもひのこしぬ松かはかまにかへ行らん

さのみしらぬ年のくれもまたつもりぬる松しるべにこそ年の暮

まつくれて行あるかな

くれ行のはるをまつのおくにさゝへてはるまちやとはなくらん

まのくれにはよりつまかきくれてゆくなる

あさふりのましきはまて行つる木まであさひや都にまつをしたふらん

ぬし見る春にあらしとて

月みてくれてまちかねてくれぬあひみるよいはまちてまし

まのくれて春

あらためてやさこのつとめし行しら見ぬ人にこそ思ひをのましか

しら見ぬれ人の春く

くらしかねしころにたのまれんむかしの見るもあらしとて

さしのくれて女のまへにいれてしくやるとて

ふるみるあさひらんいはさいつもそのかはたるさぬなり

たつくさしるよのつろひまのくれは

よみなれいにそきみゆめ人とも集の戸あらんやう詠ちらめに
はのかにきゝていはかく世の人のふあらそのれいくらみ
詠し月みみ枕のむねのするをもえなりけりて
え数しのぞよみしをおほねかへらんとはおいせさるらん
身をおのこのあなしつまあのる大和代にあひてし
つのよこゝろのさへまさるなの中にもはへるれ行さそらて
てさらによそひのはるかにわかりしもおもひへらん
されと人まねにおよひやとかくなん
そもみちあくまくめてし貫之たに及ぶと思ひけるなれ
まことにそこにあらはるし詠れは
さしとあ思ひける抑もちは何せふものよともあかしを

寒草霜

うらかれてふるよの河をもみなやらで霜ぞみなかよきの原

山本宗源

ゑつのまさこゝの木ならくくるなりとも数ふとも このくらきそふ

書懐近

たのむふつねにかならぬ筆も書絵のへ不見ゆることそなれ
ぬひめこの詠草の金子ほ色紙の表への事なく
かゝあとのけ短冊あけのこのくを振さらしく人体との拵へやしる

追儺

京人のとこし桃のたつの弓をさしてまふいるみちそありける
ぬひめこうふ短詠草金子さはらの表方たえみさるる人は

めくみあつこよしと一樽とのきみかさくあはれやこの方もふるされぬへきし

いふくそのよしけるふなく除夜し

まるまるとはやふつけて梅東くれ玉ちよのましと松の子せそのかへり

冬旱

東風新のこるひふつるるひのかはさむさしあいのほ　秋影

冬枯山

箱根山東をふてえはきゆまちの秋のねさめる本かう　秋風

東人の荷おやかにくよみこあく物川するあしのらのやま

冬野やくれ

さらしのみなつまりおもひもやまちれ烟まさそう　在年

冬海

こやしせま霰ほくやさつきのこのさしふせさふせるむもちるこのふ

冬田

許ふてくむつきせて冬除き田のもハしふみそりなつ

松のみのまく冬の田とし

ちつれさふころ雲よせのきこし田の秋くれてこうらさえこのかくれ

このはくれ雲ひかりの田の面子むのひかれハや

田つるひつちまくのか

ほふもねを刈人ふふく中くふき田のひつちとろう結まけある

唐風の道ふ冬むさし野の旅人なそか

いつくふの田の子ふもめんむらさきの根ちう大野もうれやるところ

刀祢川冬

伊香保風にふけハのど糸川の瀬ふきかなをおかしきかな

冬木

寒けさの嵐烈しく梅の木もおつるこのはの松もひまなし

冬のまゝみなの姫も志らのさとく冬ごもりするかな

冬禽

寒きむら萩の古枝にうちはふきしま鳥のかの野辺のうくひす

冬獣

雪ふりつゞけなまちぞくおぬをいつくる犬とあそびてまれ

大はえや桧原のすさまじくれハ横川とゞもふましらなくや

冬虫

ぬしらぬかげしとまりてまくちる花しあせしたそみる

冬遊

梅姫のかれ野も柱ゝも莉乃るらのよその梅のもの[illegible]か錦

冬眺望

さえ〳〵たのきしとむらあしの屋しての雲かね赤く志ぐるゝ哉

冬祝

人とよろこぶく冬祝

むかしと海沖の船まて帆あるまれつるよとよつやたのしあ

八十九

4年9月

[illegible]

八十 竟九 七

尾ゝ東の野